

この原稿をラオスの首都ビエンチャンで書いています。私にとって今回が初めてのラオス訪問。ちなみに、これで、東南アジア諸国連合（ASEAN）10カ国をすべて訪問したことになる。

ビエンチャンでは、日本でもこのところ話題の、ラオス証券取引所を訪問した。田園風景の中に突然現れる8階建ての近代的なビルだ。韓国証

ラオス証券取引所

東京大教授 伊藤 隆敏



元韓国証券の人は元韓国証券の人は元韓国証券の人である。国営企業2社

券取引所が49%、ラオス政府が51%の資本を出した合弁会社である。最高経営責任者（CEO）は元ラオス中央銀行の人、最高執行責任者（COO）

（電力会社と銀行）を上場企業として、1月11日に取引を開始した。両社とも、国がまだ過半の株を保有しているが、取引開始から、14営業日連続で、毎日5%の値幅制限いっ

ばいに上昇を続け、わずか半月で、株価はほぼ倍になった。この2日間は、株価が下落しているとのこと。ただ「春節で中国人投資家が休んだからだろう」と楽観的だった。コンピューターで取引をマッチングしていると、いうが、1日2回、「板寄せ」取引を行っているだけだ。つまり、午前8時半〜11時半の取引時間中、10時と11時半の2回、その時点で売買注文がちょうど一致する価格を見つけて取引実行する。取引証券会社は2社しかない。

い。上場企業数も、取引方法も、まだまだ原始的だ。ラオスは、ここ数年、電力や鉱物資源の輸出などで、年7%を超える経済成長を遂げてきた。1人当たりの所得水準はASEAN10カ国のなかの最低に近いが、その裏返しは、今後の成長可能性でもある。社会主義から、徐々に改革を進め、株式市場も作った。「資本流入で通貨は過大評価気味」という「新」新興市場国共通の悩みを抱えながら、ラオスの成長はしばらく続きそうだ。